
サイダー

そあ。。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サイダー

【Nコード】
N8303M

【作者名】
そあ。。

【あらすじ】
退屈な日常を送る中学生が出会っ非日常。
少年は彼女に出会い、変わってゆく。
夏の初めの、ちょっと切ない物語。

（前書き）

初投稿です。

文章力はまだまだ未熟ですが、お付き合い頂けると幸いです。

・・・熱い。

焼けるような太陽の日差しを背中に受けつつ、僕は歩いていた。日差しとアスファルトからの照り返しで、体中の水分が全て取られてしまいそうだ。

季節は夏。

七月の中ごろ、夏の本番を告げるような昼下がりがり。

退屈な授業を終え、真っ先に鞆を掴むと校舎から出て帰路につく。部活には入っていない。

僕は運動が苦手だ。体育の授業の成績なんてのはいつも1。

これで勉強が得意、とかだったらまだしも勉強も得意という訳でもなく、中の上程度だ。

交友関係についても、良好とは言い難い。

基本的に休み時間などは寝ていたりするし、自分から積極的にクラスメイトに話しかけるなんて事はしないので、友達も片手で数える程しかない。最も、向こうは友達と思っているかは分からないが。僕は根暗で、運動音痴で、社交性に欠ける。要は駄目人間だ。

僕は自分の事があまり好きではない。

今の日常は退屈だが特に問題はない、毎日毎日同じ動作を行ってループするだけ。

それで飽きないのかと聞かれれば返答には詰まる・・・が答えはYESとなってしまう。

退屈しつつも、そこを苦とすることはなく、日々をやり過ごす。

そんな僕は今日もまた、機械仕掛けのよう一日を送る。

放課後の校庭からは、部活動に勤しむ生徒たちの声が聞こえてくる。それを横目に見つつ校舎から抜け出すと、ちょっとした山道にはいなかった。

さて、あそこで一休みしていこう。

校舎から歩いて十分、山道を登りきったところにベンチが一つと小さな自販機がある。

そこで買える五十円のサイダーを買い、喉を潤すのが僕の日課というか習慣だ。

ガラングロン！と自販機が壊れてしまいそんな程の音にも、もう慣れたもの。

青い下地に黒でサイダーと書かれているだけのそれを開けると、一気に飲み干す。

「んくっ・・・ハア」

砂糖水を炭酸で割ったような安直な甘みが口の中を支配していく。

値段が値段なので文句は言えないがお世辞にも美味しいとは言えない代物だ。

しかし、ふと飲みたくなってしまう。

そんな不思議な味なのだ。

一息つくとベンチに腰掛け、街を見下ろす。

左側には学校があり、後は畑が広がっている。

住宅はこの調度裏側に広がっているので、目の前には畑と山しか見えない。

ここからの景色は中々に心地よいものであり、加えて人氣が全くないということも重なって、僕はこの場所が好きだ。

朝起きて、学校に行き、ここで休み、家に帰り、寝る。

傍から見たらつまらないと思われるかもしれないが、中々、悪くはない。

それだけの毎日が続いていく。誰だってそう思うだろうし、僕だって例外ではない。

そう思っていたんだ。

偶然とは、予測せずに起こるから偶然なのだ。

不意に、突然にやってくるから偶然であり

・・・それは、突然訪れた。

「こんにちは」

背後から、耳に入り込んでくるような、透明感のある声を聞いた
「ふあっ!!」

中学校に入って一年と少し。

一度もこの場所で人と会ったことはない、それ故に驚きは隠せなかった。

「驚かせた?ごめんなさい」

声につられて振り向くと、一人の女性がたっていた。

――綺麗だ。

美人というのはこんな人の事を言うんだと思った。

158cmの僕より5cm以上は高い身長とスラッと伸びた手足。肩までかかった黒髪は、艶やかで真っ直ぐに伸びている。

恐らくは高校生であろう、その制服には見覚えがある。

袖から見えるその肌は病的なまでに白い。

整った顔からはどこか理知的な雰囲気醸し出されている。

完璧を体で表したような美人が、そこには居た。

「・・・なに?」

あまりにも長く凝視していたからだろう、彼女は少し困ったような風に首をかしげて聞いてくる。

まずい、早く視線を逸らさなければ。

「ごっ、ごめんなさいっ!」

慌てて視線を逸らすと、訂正の言葉延べ、俯く。
自分でも耳まで赤くなるのが分かった。

「フフ・・・隣いい?」

こちらの心の中を見透かしたように、彼女は微かな微笑みを浮かべていた。

心臓が脈打ち、バウンドするように鼓動する。

「え?!あ、はいっ!」

落ちつかないまま、口をついた言葉はとてもおぼつかない物だった。
再度、赤面してしまう。

「じゃあ、失礼するね」

そう言つて僕の隣に腰掛けた彼女からは香水だろうか、皮を剥いていない八朔のような、甘酸っぱくもどこか苦い。そんな匂いがしてきた。

トクンと心臓が跳ねる。僕の十三年の人生の中で母親や親族以外の異性と喋ることはあまりなかったように思う。

僕はこういう状況に慣れていないし、ましてや二人きり、なんていうのは尚更だ。

僕の座っているベンチはあまり大きい物ではなく密着とまではいかないものの、自然と距離は近くなってしまう。

・・・まずい、どうにかしてこの状況を抜け出さなければ。チラリと、彼女の方を向く。

・・・目が合った。しかし無言のままである。
「何？」

この沈黙に痺れを切らした彼女が聞いてくる。

初対面の中学生に顔をまじまじと見つめられたら、疑問に思つのは当然だろう。

「いやっ、あの・・・その、えっと」

しまった。何も考えずに喋りだしたのはいいものの、答えは用意していない。

突然、彼女がクスツとほんの少しではあるが笑った。

「少年。もしかして、緊張してる？」

図星だ。

というか今の僕の態度を見ていれば分かるのも当然だ。

「え、あ、はい」

ここにきてやっと、僕は意思を示した気がする。

「女の子と一緒に居るのは苦手？」

「あまりそういう機会がないんです」

よし、喋れた。緊張がすこし緩み、落ち着く。

段々と落ち着いていくのと共に、相手を観察する余裕ができていた。背筋をピンと伸ばし膝に手を置いた凜とした姿勢には、どこか気品

のようなものが見て取れる。

常人とはどこか違う佇まいに、僅かな気後れさえ感じてしまう。

「あれ？君、そのサイダー好きなの？」

ふと、僕が手にしていたサイダーの缶を指差して問う。

「ええ、まあ」

とつさに口を出した答えはひどく曖昧なものだったが、それを肯定と受け取ったんだろう、彼女は目を輝かせつつ言う。

「本当？！それ、私も好きなの！友達に勧めても中々分かってもらえなくてねっ！」

しまった。こんな所で食いつかれるとは思ひもしなかった。

先ほどの静かなイメージとは打って変わり、急に態度が変わったのですこしうろたえてしまう。

「その砂糖っぽい甘さがいいと思わない？」

すこし落ち着いたのか、口調は幾分落ち着いたが、彼女は興奮冷めやらぬままに言葉を発している。

兎に角。

やっと話題が見つかったのだ。

これに乗らない手はないだろう。

「ですね、僕もそう思います」

「でしょう！」

少しぎこちない愛想笑いになってしまったが、彼女は気づいていないようだ。

「私もよく買ってるの・・・んっ」

少し気だるそうに立ち上がると、ベンチの真横に位置する自動販売機へと歩いていく。

そちらへ、視線を向けることなくぼんやりと街を眺める。

ガランゴロン！という自販機の悲鳴のような音と共に、彼女は手にサイダーを二本持って戻ってくる。

二本も飲むのだろうか、と考えていると片方を僕に渡す。

「はい！」

彼女の笑顔に押されてか、それを手にとってしまっ。

「ありがとうございます。」

素直に感謝の意を伝えると、満足したように頷く。

心なしか表情が緩んでいるように見える。

よく分からない人だ。

だが、嫌な印象は微塵も受けないので羨ましい。

プシュツ。

とサイダーを開けた後、彼女はゆっくりとそれを飲む。

自分は味わうほどに美味しくは思えないのだが、とてもいい表情で飲んでいるのをみたら、つられて缶を開けてしまっ。

「んくっ」

一口飲むと、口の中にはやはり砂糖水のような安直な甘みが広がる。やっぱり、僕はお世辞にも美味しいとは思えなかった。

暫く、彼女のペースに合わせつつゆっくりとサイダーを飲む。

このベンチは木陰になっている為、暑さは余り感じない。

時折吹く風を涼しく思える程だ。

静かに、時が流れていく。

それを特にどうする訳でもなく、僕はただ街を見下ろしつつ一定の間隔でサイダーを流し込む。

・・・どれくらい、そうしていただろうか。

恐らく、十分やそこらではあるが、僕にはとても永く感じられた。

「じゃあ、私そろそろ帰るわね」

すっかり、彼女は元の調子に戻っているようだ。

「はい、それでは」

「ばいばい」

簡単に言葉を交わすと、彼女は、これまた背筋をピンと伸ばして歩いていく。

やはり、その背中からは気品のようなものが感じられ、すこし、おかしい人だと思う。

姿が見えなくなり、一息つくとしち上がる。

手に持っているサイダーの缶から僅かに重みを感じる。

僕の、何も変わらない日常。

そこに突如生じた非日常。

悪くない・・・な。

ふと、自分の頬が緩んでいることに気づく。

うん、悪くない。

また、会えないものかと少し期待してしまっほに。

「んくっ」

いつもと変わらない景色を眺めつつ、サイダーを流し込む。

少しだけ、この味が好きになった気がした。

翌日から、ちょっとだけ僕の日常は変化する事になる。

その日も僕は、いつもの様にベンチに座っていた。

「やあ、少年」

聞き覚えのある声を背後から聴いた。

反射的に振り向くと、やはり、そこには彼女がいたのだった。

「また会ったね。少年」

二度目の邂逅だが、今回は偶然と言うわけではなく時間があつたから来たらしい。

・ ・ ・ そんな事が2、3回と続き、度々ここで顔を合わせる事になった。

毎日という訳ではないが、少し世間話をして、サイダーを飲んで帰る。

そんな日が数日続いた。

つい先日、彼女に聞いてみた事がある。

それは、どうしてここに来るようになったのか、だ。

僕は一年以上もここに通っているわけで、いままで一度も彼女と会ったことはなかった。

一瞬、僕に会いに。なんて馬鹿らしい考えも思い浮かんだが直ぐにやめた。

何を期待してるんだか、全く。

そして、返ってきた答えはシンプルなものだった。

彼女は真剣な顔つきで、こう言った。

だって、面白いじゃない。こういうの。

ああ、と直ぐに納得した自分が居たことを覚えている。

僕にとって退屈な日常の中に突如現れた、非日常。

彼女にも、不思議な出来事だったんだろう。

その非日常を、彼女はすこしだけ追ってみたくなったのだ。

それをすこし羨ましいと僕は思った。

理由は単純で、僕はそれを追いかけようと、手を伸ばそうとは考えられなかった。

明日からはいままでの毎日に戻ると考えたらしばかりの未練はあったが、結局そこで満足してしまうのが僕なのだ。

ちよつとした自己嫌悪。まあよくあることだ。

そんなことを考えている内に、今日もこの場所へ辿り着く。

「暑つついなあ」

思わず声に出してしまうほど、今日は熱かった。

更に、湿度も高いのだろうか、蒸し熱いと来ている。

今朝のニュースをみた限りでは、気温は35度まで上がるらしい。

ここまで来れば割りと涼しいのだが、片道10分の道のりは中々にキツイものがある。

ベンチに腰掛けて一息つくと、否応にも首筋や背中から汗の嫌な感触が伝わってくる。

・・・タオルでも持って来れば良かった。

取り敢えず、サイダーでも飲もう。

そう思った矢先、やはり背後から透き通るような声が入ってくる。

「やあ、少年」

珍しい、彼女はいつも僕より15分は遅いの。

「あ、私が奢るよ」

毎回、彼女と会う前に僕はサイダー本を飲みきっている。

彼女は来るたびにサイダーを二本買い、僕に渡す。

申し訳ないと思う反面、気遣いを無碍にしたくはない。

そんな訳で毎回貰ってしまっているのだが。

「ありがとうございます」

中学生の僕にとってはありがたい話だ。

素直に受け取らせてもらう。

「はい」

缶を受け取ると、すぐさまプルトップ引っ張り、一口飲む。

「くすっ」

そんな様子がおかしかったのか、彼女は小さく笑う。

・・・少し、いやかなり恥ずかしい。

「喉、渴くよね」

顔を赤くした僕を気遣ったのだろう。

余計に恥ずかしい。

「はい、今日はいつにもまして暑いので余計に渴きます」

「35度まで上がるんだっけ、朝のニュースで見た」

「しかも湿度が高いですしね」

等と、いつものように世間話を始める。

いつもの様に、本当に他愛もない会話。

不思議とそれは、心地よいものであり、まだ数回のことなのに、そ

れが当たり前の様に感じた。

そんな中、やはり変化が訪れる。

やはり唐突に、なんの前触れもなく。

ふと、彼女が切り出した。

「私ね、変な子でしょう。学校では物静かな女の子って感じで通しているのに、少し興奮すると性格が変わっちゃうの。でもね、どっちの自分も偽ってる訳じゃないの・・・」

そこで、すこし苦しそうにひと呼吸置いて。

「仲のいい友達を知っているんだけど、初めて見られたときにそう

いうのって変に見えないかなって。どう？」

「つくく」

思わず吹き出してしまった。

その反応に怒ったのか、少し不機嫌そうに彼女が言う。

「何よ、何で笑うの」

しまった、怒らせてしまった様だ。

いつもは堂々として、一切の負の感情がないように振舞う彼女が真剣に、しかも心底不安というような表情をしているから、なんて口が裂けても言えない。

「すいません、なんか意外だったから」

「私に悩み事は似合わないって言いたいの？」

まずい、方向をかえなければ。

「別に、変には見えないと思いますよ。」

率直な意見を投げかけてみる。

「本当に？」

「ええ、本当に」

むしろ、テンションが高い時の彼女の方が人当たりはいいのではないかなとも思う。

・・・僕は圧倒されてしまって、少し喋りにくいけど。

「変に隠す必要ないですよ」

「そうかな？」

「はい」

すこし、驚いた様な顔をして沈黙。

数秒の間が空いた後、彼女は少し視線を泳がせると、

「ありがとう」

そーー眩しすぎるくらいの、弾ける笑顔で言った。

不意に、ドクン、と心臓が大きくバウンドする。

「じゃあ、またね」

そう言つて、彼女はすいと歩いていつてしまった。

「・・・あ」

その後ろ姿ををボーっと見ていると、少しずつ鼓動が収まっていくながら分かる。

だが、それは消える事なく胸の奥で響き続けていた。

・・・今日は少し喋りすぎたかもしれない。

僕たちはやけに饒舌だった。

僕はあまり喋るのが得意ではないから、こういうのはたまいにいい。

未だやむ気配のない鼓動と、それに乗じてあがってきた体温を抑えるようにサイダーを飲む。

「ん・・・コクッ」

また、もう少し、この味が好きになった気がした。

・・・鼓動が、治まらない。

それに危険性を感じ始めたのは、その日夜中のことだった。

小さく、ゆっくりとではあるが、脈打ち始めたそれは止まることを知らない。

夕飯を食べた時も、風呂に入った時も、何をしても胸の奥に居座り続ける。

時刻は午前二時。

さつきから異常に喉が渇く、水が欲しい。

這うような格好で自室から出ると、一階の台所までやっと辿り着く。母の性格からか隅々まで磨き上げられたシンクは月明かりを綺麗に反射し、鈍い銀色に光っている。

その光に若干顔を歪めつつ、蛇口を捻り水を飲む。

ゴクゴクと音を立てながら、体に水を流し込むと、少しずつ体が楽になっていくのが分かる。

「・・・!っはあ・・・」

思わず呼吸する事を忘れていたらしく、肺が苦しい。

ぜえぜえと荒い呼吸を繰り返しゃつと落ち着いてきた頃、気づいた。鼓動が治まっている。

おかしなものだなと少し笑ってしまいそうになる。

まあ、取り敢えず治まったのだから喜ぶべきなのであろう。

ホツと胸をなでおろすと、安堵感に包まれる。

よし、大丈夫だ。

頭のでっぺんからつま先まで異変はないか探るが、特にない。

「良かった、な」

思わず口に出してしまったが、何時間も治まらなかったわけだから仕方ない。

急に体が軽く、楽になっていることに気づき、それと同時に眠気も襲ってくる。

ふらふらと階段を上り、自室のベッドに倒れこむと意識が既に薄れていくのを感じる。

独特の浮遊感に包まれながら、頭を振り絞って考えた。

原因は分かっている。

恐らく彼女の事だろう。

今まで心の中で否定してきたが、もう認めるしかないのかもしれない。

そこまで考えたところで、意識がブラックアウトしていく。

眠りに落ちる最中、僕はひとつの推論を導き出した。

――これが、恋、なのか？

今日も、暑い。

学校へと続く一本道は、今日もたくさんの生徒で溢れかえっている。加えて、というかこちらの理由の方が大きいのだが、今日の最高気温は昨日を一度上回って36度らしい。

あまりに暑すぎて、来週辺りには通学途中に溶けて無くなってしまふのではないかと半ば本気で考えてしまう程だ。

夏の強い日差しと、その照り返しでキラキラと光る一本道。

その先に見える学校がとても遠く感じられる。

今日もこの道を歩かなければいけないのかと思い、うんざりしていた時のことだった。

「よう、久しぶり」

たらたらと歩く僕の右脇から聞こえた声の主に、僕は見覚えがあった。

去年、同じクラスだった男だ。

学校指定のジャージを着ている所を見ると、運動部に所属しているらしい。

確か野球部だったと記憶している。

最も、彼が坊主でなければ思い出す事もなかったかもしれないが。クラスでの関わりは少なく、会話を交わした事なんて全くといっていい程なかった筈だ。

そんな彼が僕に話しかけている事に疑問を感じていると、おもむろに彼が口を開く。

「この頃、たまに見かけるけどなんかいい事でもあったか？」

トン、と軽く小突かれたような衝撃を受ける。

確かに、ここ最近僕には変化があった。

それは僕にとって数少ない人との繋がりであったし、楽しいとも感じていた。

しかし、その変化が普段の生活にまで影響しているというのは信じられない。

僕はそこまで感情が顔にでしてしまうタイプなのだろうか。

「何故？」

「いや、なんか前よか明るい感じがする。前は死んだ魚みたいな目してたからな」

死んだ魚とは酷い言われ様だと若干憤慨しつつも、あまり悪い気はしない。

「じゃなー」

そう言うとは彼は足早に人ごみの間をすり抜け、見えなくなってしまう

った。

明るい感じ、か。

あまり面識の無い人でさえも、僕の変化は感じ取れたのだろう。とても大きな変化だったのかもしれない、と考える。

それと同時に、今までの自分を変化させた原因であろう彼女が思い浮かぶ。

全く、僕はどうしてしまったのだろうか。

軽い苦笑と共に、深く息を吐く。

不思議と、爽やかな気分だ。

さあ、今日も一日頑張ろうか、等と柄にも無い事を考えつつ、学校に足を向けて。

一歩、踏み出した。

退屈な授業も終わり皆が下校や、部活動に勤しむ中、僕は全く帰り道に背を向ける。

勿論、あの場所へ行く為だ。

登校時よりも強い日差しと熱気を受けつつ、山道を登っていく。

太陽の光の反射でガラガラと光るアスファルトを薄く睨みつつ、ガイドレールの先にある森が作った日陰を歩く。

ふと足元を見ると、影がやけに短く感じられる。

それ程までに太陽が高い位置まで昇っているのだろうか。

日陰に入ると暑さもかなり和らぐが、それでも暑い。

頭皮から汗が滲んでくるのが鮮明に感じられ、心の中で舌打ちする。左手に持つ学生鞆がやけに重く感じられる。

暑さのせいだろうか、頭が上手く回っている気がせずに、無心で坂を上っていく。

ガイドレールの先に広がる木々が道路に作る日陰は予想より短く、暑さは緩和できそうに無い。

Yシャツの背中がしっとりと湿ってベタつく汗の感触に嫌気が差し始めた頃、僕はベンチに辿り着いた。

ベンチの右端へゆつくりと腰掛ける。

暫く、街を眺めていると、背後から彼女の声が聞こえた。

「やあ、少年」

「こんにちは、今日も暑いですね」

僕は会話自体得意な方ではないので、いつも第一声はこれになってしまっている。

実際暑いので、ついつい口にしてしまう。

こういう時、もう少しバリエーションがあればと思う。

最も、彼女と話す機会が増えてからは、少しは会話への苦手意識も薄れてきた。

「はい、どうぞ」

不意に、彼女の左手が僕に差し出される。

その手は、サイダーの缶を握っていた。

驚いた、いつの間にか買っていたんだろ。

大方、僕がボーッとしていて気づかなかったのではないかと思うのだが。

「ありがとうございます」

もう5回目くらいとなるが、彼女からサイダーを受け取る。

早速一口飲むと、暑さのせいもおおいにあるが、美味しく感じられる。

そして、彼女との雑談が始まる。

会話の内容は大体ニュース関連が多い。

性別や年齢も違うので共通の話題が事のほかに少ないのは仕方ない。

今日は、この頃話題になっている通り魔の話だ。

どこにでもある内容だが、彼女と話していると興味深いものに思えてくるから不思議だ。

そして、15分程話していると、彼女がサイダーを飲み終わり、缶を手の中で弄んでいるのが分かる。

これが、僕たちが解散する合図というか目安みたいなものだ。

「本当に暑いね」

彼女が少し疲れたような顔で言う。

「ですね」

「でも、私の学校は明日から夏休みなんだ。」

「僕のところですよ」

そう、明日からは夏休みなのだ。

今日の帰りの号令でが終わった瞬間クラスの大半が騒いでいたのを覚えている。

・・・夏休み、か。

一般的な学生にとって夏休みというのは嬉しいものなのかもしれないが、僕にとってはそうでもない。

授業という暇つぶしが無くなるので暇を持て余してしまい、時間を浪費している感覚に取り付かれてしまう。

しかも、夏休みに入るということは僕と彼女が会う機会が無くなることを意味している。

折角手にした、僕が変われるチャンスだと思う。

彼女に抱いた感情もまだ失いたくはない。

それに、今日の朝野球部の彼に言われた一言で確信した。

僕は変化している。

それもいい方向へ向かっている。

だから、僕のは一つの決心を抱えていた。

今日、授業中にずっと考えていた言葉を今言おう。

別に付き合ってくださいとかそういうものではないし、決心の要るような台詞には聞こえないかもしれない。

それでも僕にとってはとても重要で、これを言うことが出来れば大きく変われるような気がした。

深く深呼吸をすると、視線を彼女へと向ける。

そして僕は、口を開いた。

「あの「あのね、少年」」

だが、それは彼女に遮られてしまった。

そして彼女は、嬉しさと恥ずかしさが入り混じったような顔で言う。

「私ね、好きな人が居たの。クラスメイトで少しはお喋りしてたんだけど、私の静かなイメージが定着していて、それが崩れたら嫌われるかもって不安だった。でも、君に相談して勇気が出て、昨日告白したの」

視界が・・・揺れる。

何故？急に？どうして？

疑問符で頭が埋め尽くされ、頭は回りそうも無い。

上下に、左右にぐらつく視界をなんとか建て直すが体に力が入らず、咄嗟にベンチに手を書け体制を整える。

なんとか、彼女の声は拾うことが出来た。

「それでね、OK貰ったの！」

彼女は嬉々として、それを話している。

どうすればいい？

何か言わなきゃ何か言わなきゃ何か言わなきゃ。

けど、口は開いても声を発する事ができない。

「そう、で、すか」

震えた声ではあったが、何とか声を絞り出す。

それが、限界だった。

「それで、その・・・」

彼女の声音が沈むのが分かる。

そして、二の句の内容は大体予想がついた。

嫌だ、聞きたくない。

「もう、ここに来るのは」

嫌だ嫌だイヤダイヤダいやだ。

もう何も考えられず、むき出しの感情が体の中から外へ溢れ出すことを押しとどめるので精一杯だ。

彼女は、それを告げるのに一瞬ためらう。

その一瞬が、永遠のように感じられた。

どうしよう、どうすれば、嫌だ、考えなくちゃ、何を。

そんな僕の思考が落ち着くはずもなく時間切れとなった。

彼女ははつきりと、僕に告げる。

「終わりにしようと思うの」

・・・僕は、何も言うことが出来なかった。

彼女はくるりと踵を返すと、片で風を切るように颯爽と歩いて行く。僕はやはり、その後ろ姿を黙って見送るしかない。

100m程歩いたところで、突然彼女がこちらに振り向く。

彼女は、少しだけ寂しげな微笑みを浮かべていた。

「少年、じゃあね」

そうして、僕の非日常は、幕を閉じた。

「何やってんだか、僕は」

夕暮れに染まりゆく街をただひたすらに眺めながら苦笑する。

僕は、今の僕自身の心境に驚いている。

まさか、こんなに落ち込むとは思ってもなかった。

言葉では形容できない暗い感情が、体を支配している。

全く僕はどれだけ惨めなのだろうか、逆に笑いすら込み上げてしま
う。

勝手に一人で悩んで、勝手に一人で落ち込んで、馬鹿みたいだな。

結局、お互いの名前すら知らなかったじゃないか。

僕が大切だと思っていた非日常も彼女にとっては些細なことだった
のかもしれない。

そう思うと悲しさが一層強く込み上げてくる。

・・・だけど。

今、悲しいと思っていることが。

悲しいと、そう思えることが。

何故だか無性に嬉しいと考えている自分がいる。

今までにこんなに強い感情を抱いたことはただの一度もなかった。

何事にも執着できず冷めた考えしか持てなかった、嫌いだっただ昔の
自分はいつの間にか、悲しみや嬉しさを十分に感じられる様な人間

になれている。

この一週間と少しの出来事は確かに僕の存在に変化を促した。

だが、彼女との関係は綺麗サッパリ無くなってしまったし、惨めな男子中学生が無理やり前向きに考えようとしているだけかもしれない。

しかし、まだまだ精神的にも未熟な僕にはどれが正解なのかは分からない。

それに、何も今考える必要性はないと思う。

だから、今日はもう帰ろう。

ふと、左手に持っているサイダーがまだ残っていることに気付く。

僕は、それを一気に飲み干した。

「ん、こくっ」

炭酸の抜けきったそれは飲めるようなものではなく、

・・・少し、しょっぱかった。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8303m/>

サイダー

2010年10月28日00時52分発行